2Mp-3

旭川地方の北海道アイヌ建築

駒澤大学苫小牧短期大学(非)　○小林法道

【研究目的】文献資料をもとに旭川地方の北海道アイヌ建築を編纂しておけば旭川地方の北海道アイヌ建築を郷土文化として正確に伝承して行くことができる。本論は文献資料をもとに江戸時代後期（18世紀末期）から昭和時代初期（20世紀前期）までの旭川地方の北海道アイヌ建築を編纂してその形態と変革を考察する。

【研究方法】本論は江戸時代後期(18世紀末期)から昭和56年(1981年)までの約２世紀に渡る５名と１集団の調査者が調査して記録した旭川地方の北海道アイヌ建築が記録されている８冊の文献をもとに旭川地方の北海道アイヌ建築を編纂し、江戸時代後期(18世紀末期)から昭和時代初期(20世紀前期)までの旭川地方の北海道アイヌ建築の変革を考察する。

【研究結果】江戸時代から旭川地方の北海道アイヌ建築は神窓を東側(石狩川の上流)に向けて配置されている。平面形は明治時代末期(20世紀初期)以降に新しい平面形が出現し、入口の位置は明治時代後期から変化している。江戸時代から神窓は主屋の奥妻面に設置され、煙出窓の位置は明治時代後期以降に変化している。明治時代後期から大正時代（20世紀前期）の床は土間に莚を敷き詰める床と板敷の床であり、主屋の奥妻面の神窓の前に祭壇があり、主屋の左側面の奥に鍵形の宝壇がある。明治時代後期から昭和時代初期(20世紀前期)には炉は主屋の中央部または神窓の反対側の妻面の近くに設置され、夫婦の寝床は主屋の左側の壁に沿って設置され、家族の寝床が主屋の右側面の壁に沿って設置される場合もある。明治30年頃(19世紀末期)にはケツンニ構造の小屋組であり昭和時代初期には変態のケツンニ構造の小屋組に変化している。江戸時代後期（18世紀末期）から昭和時代初期(20世紀前期)には笹葺住居と樹皮葺住居があり、古くは草葺住居もあり、明治時代末期から大正時代(20世紀前期)には和風住居の影響を受けた板葺住居もある。